

高校生 加害の歴史も伝えたい

2010年
8月25日(水)

カマを回し栗山さん(左)に取材する高校生たち。川崎市多摩区の明治大学生田ヤンパスで



で武器の部品製造に携わった元所員を取材しながら、自分たちが戦争向き含む過程を記録しようとして映画づくりに取り組んでいる。「被害者の視点だけでなく、加害者の視点から(川崎市川崎区)の生らも戦争を知りたい。徒六人が、戦時中にもその過程も映画にして陸軍第九技術研究所 発信したい」。生徒た(通称・登戸研究所)たちは、制作にかける思



川崎・大師高 登戸研究所元所員に取材、映画に

いを口にして。識はなぐ、命令は絶対生徒たちは二十四だ「毒を扱っている日、登戸研究所元所員らしいとは思ったの栗山武雄さん(左)」。栗山さんの言葉東京都狛江市と一緒を、生徒たちは真剣な表情で聞いた。この日の取材を終えバス(川崎市多摩区)にある登戸研究所資料館大竹一希君(左)は話を聞いた。かっこいい主観によって戦争の形は違っものだと知っここに諷刺活動などの秘密を聞き、兵器を開発して来た研究所が野こずえさん(左)は「戦争には、被害者、加害者両方の視点がある。」「就職先は役所だ加害者側の視点から言われて入った。」「ることを伝えたい」と栗山さんは生徒が回す口元を引き締めた。カマの前で、訥々と放送部顧問で、指導話した。研究所に入っする山崎栄一(教諭)は、「生徒たちに知らたのは十五歳のとき。」「消音ストルボタン」が知らずのうちに加害型カマの部品製造に者となった人たちが、かわった。戦況が悪川崎にもいたことを知化した後は、分解したつてもいいかった機械を持ち出して兵庫と話した。栗に疎開し、十八歳で終戦を迎えた。「誰が何をやっていて川崎区内のイベントを分らず、完成品で上映する予定だ。も見たことはない」(川崎支局・平木友見「武器を作っている様子